『名探偵ポワロ』完全ガイド

久我真樹

世界中で愛され続ける名作ドラマシリーズ『名探偵ポワロ』の

全70話を全力解説!

英国文化研究者の熱愛が炸裂する
ドラマファンもミステリファンもクリスティーファンも唸る徹底ガイド!

『名探偵ポワロ』完全ガイド

久我真樹

星海社

163

SEIKAISHA SHINSHO

はじめに

ドラマ『名探偵ポワロ』（ＩＴＶ）は、世界的ミステリ作家で「ミステリの女王」とも呼ばれる推理小説作家、アガサ・クリスティー（１８９０－１９７６年）の小説をドラマ化した作品です。

クリスティーは２０２０年にデビュー１００年を迎え、その著作は世界中で20億冊が売られたと言われており、かつては「聖書とシェイクスピア作品に次いで読まれている」と評されたほどに偉大な作家でした。

そのクリスティーが生み出したポワロシリーズは、私立探偵エルキュール・ポワロを主人公として、上流階級の遺産相続や不審な毒殺を巡る事件から国家的陰謀、あるいは失踪したコック捜しまで、多くの謎を解決していく筋立てです。

ポワロというシャーロック・ホームズに比肩する知名度の世界的名探偵を生み出すとともに、パートナーで退役陸軍大尉のヘイスティングス、秘書のミス・レモンといった探偵

をサポートするいわゆるワトソン役や、レストレード警部のような警察サイドのパートナーたるジャップ主任警部といった魅力的なキャラクターたちを輩出しました。
シリーズでは、『オリエント急行の殺人』『アクロイド殺し』などでミステリ史に燦然と屹立する革命的トリックをいくつも生み出し、また屋敷や列車などの閉鎖的な空間を舞台にした「クローズド・サークル」ものを数多く描き、いわば本格ミステリというジャンルの定番を築き上げたと言っても過言ではないでしょう。ミステリの熱心な読者でない方もそのモチーフを継承する作品に触れたことがあるのではないでしょうか。

そんな原作小説をドラマ化した『名探偵ポワロ』は、1989年から2013年まで、実に24年にわたって英国で放送されました。
ドラマの舞台は1930年代の英国です。ドラマでは、当時の風景を再現する伝統的な貴族や地主の屋敷から、アール・デコやモダニズムといった当時の最新建築や家具、インテリア、ファッション、車、美術品が登場し、作品世界を彩りました。その舞台も、モダンな都市から緑豊かに広がる田園や海辺のリゾート地、古風な町並み、さらにはフランスやエジプト、オリエントまでの各地を舞台にした原作にならい、テキストだけでは伝わり

にくい「小説の世界」を視聴者の目の前に提示し、魅了しました。

本ドラマの素晴らしい点は、それまで断片的に映像化されてきたクリスティーのポワロ作品長編33本すべてを映像化し、また短編も原案が重なるものなどを省いた37本、あわせて全70話として映像化したことにあります。

ドラマは英国で最大の海外放映されたテレビ番組のひとつとなり、日本を始め、アメリカ、エストニア、リトアニア、韓国、エジプト、ブラジル、アンゴラ、アイスランド、モーリタス、イラン、シンガポールで1億人が視聴したと言われています。放送国はロシアやインド、オーストラリア、ニュージーランドや南アフリカにも広がりました。国境を、文化圏を越えて世界中で愛されるドラマになっていったのです。

ポワロを演じた俳優デビッド・スーシェは、2000年に訪日した際には、NHKで『名探偵ポワロ』が放送されており、外交官のように扱われ、コスチュームを着ていなくても自分が誰か人々に伝わり、またすべての主要メディアの取材を受けたと語りました。中国でも、パンダを見に来た日本の旅行客がスーシェを見つけて、「エルキュール・ポワロだ」とサインと写真撮影を求めてきたとも回想しています（デビッド・スーシェ『Poirot and Me』、2013年）。

それほど愛されるポワロ役を、スーシェは25年間、演じ続けました。スーシェが主演だったことが、このドラマを名作とした大きな要因です。「最も原作に近いポワロ」と呼ばれたポワロ像を演じるため、スーシェは原作に記されたポワロの身体的特徴から性格、歩き方、服装の個性、さらには話し方まで徹底的に追求しました。

英語を話すベルギー人のポワロは、フランス人と間違われます。そこでスーシェはポワロの英語の発音がベルギー寄りではなくフランス寄りだからではないかと考え、そう聞こえる発声に取り組みました。またポワロのキャラクターを摑むために指針となる93の個性を原作から抽出し、作中の「誰もがポワロに話しかけることを好む」との言葉や「twinkle（輝き）」がポワロを示す言葉としてあったことなどを参考に「輝き」を表現したいと考えました（ピーター・ヘイニング『テレビ版 名探偵ポワロ』、求龍堂、1998年）。

さらに「視聴者がポワロを滑稽な対象として笑うのではなく、ポワロと一緒に笑うこと」を求めたクリスティーの親族にスーシェは応え、製作スタッフとともに原作への敬意と愛情と情熱で「原作に最も近いポワロ」を演じました。ドラマの撮影を終えたロケ地の屋敷も、クリスティーの別荘グリーンウェイ・ハウスというこだわりようでした。

スーシェは、このドラマに人生を懸けて取り組みました。ドラマ完結後に刊行された自

伝『Poirot and Me』には、ドラマ製作の背景や各話の裏話やシーズンごとに受けた作品評価などに加えて、ポワロ出演を優先したいものの、ドラマの「次のシーズンが」作られるか不明のままの状態に置かれ、食べていくために俳優として他の仕事を選ぶ葛藤が何回も何回も記されているのです。

もしもスーシェが途中で諦めれば、このドラマは、「ひとりの俳優がポワロを演じ切る」という形にならず、全70話のドラマ化が行われたのかもわからないものでした。

そしてその作品は世界中にファンを生み、日本でも1990年にNHKで放送されて以来、すべて放送されました。日本版の吹き替えには名優が抜擢され、ポワロを25年の間、熊倉一雄氏が演じ切りました。ヘイスティングスを演じた富山敬氏は残念ながら1995年に逝去され、以降を安原義人氏が演じ切りました。

本書では、このドラマの全70話の見所を徹底紹介します。

30年来のファンとして私が強い魅力を感じるところや、英国の屋敷や家事使用人、生活などの研究者の両方の視点を交えてお送りします。私がメイドや執事といった家事使用人の研究者で、作品としてもその領域に重なりが多いことから、お伝えする情報は時に偏り

ますが、私が「これは最高においしい！」と感じ、「これを是非味わってほしい」と思う要素を厳選して詰め込みましたので、ご賞味いただければ幸いです。
ガイドではドラマ未視聴の方が読まれることを考慮して、真犯人やトリックのストレートなネタバレは行っておりませんが、一部核心に触れる記述もあります。まったく前情報なしで楽しみたいという方は、ドラマをご視聴になってからこの本に戻ってきていただけたら幸いです。
このため、本書は「一話ずつネタバレでの完全解説・完全批評」ではないことはご承知おきください。
また「全話紹介」の際に同一テーマを別の話で触れたり、重なる話数を紹介したりすることもあります。これは、ドラマで表現されていることを覚えていただく機会として、今後に作品を繰り返し見る時、あるいは様々な作品を見た時に「楽しむための新しい視座」として、読者の方に残るものをお届けできればと考えております。
合間に挿入されるコラムでは、ネタバレ全開で「屋敷の出現数」「被害者」「家事使用人の制服」「依頼人の死亡数」などを考察し、広大なドラマの世界を一層に楽しむ手がかりとして、光を当てていきます。ぜひドラマをご覧になった後で、ご興味がある項を辿ってみ

てください。

最後に、ドラマ『名探偵ポワロ』の映像化について補足をします。知っておいていただきたい、原作から変化している点が大きくふたつあります。

一つ目は脚本のアレンジです。クリスティーの短編原作は映像にすると尺が短すぎるために話を膨らませています。さらにヘイスティングス、ミス・レモン、ジャップ主任警部が原作には登場しない作品でもレギュラーたる「ポワロ・ファミリー」として登場し、そのことによって原作よりポワロの人間味が増し、彼らとの友情が強く描かれています。

長編原作については、放送時間の制約や映像化が難しい内容などもあり、原作のキャラクターやエピソードを削ったり、役割を統合したり、大胆にリメイクしたり、新しい設定を付け加えることで原作と別の魅力を持たせるアレンジを行っています。

二つ目は、作品の舞台背景の時代の起点を1930年代半ばにしている点です。原作のポワロ作品はデビュー作『スタイルズ荘の怪事件』(1920年)から、実質的なポワロ登場最終発表作品『象は忘れない』(1972年)まで、実に半世紀に及ぶ長い期間に発表されました。基本的に作品ごとの時代背景は発表年代を反映しているため、ドラマの時代まで発

表年代に準じると、キャラクターの年齢や衣装や時代考証が複雑になります。それを回避し、世界観を統一するために、原則的に時代は１９３０年代半ばを中心とした時代になっています。

舞台となる英国は、第一次世界大戦（１９１４－１９１８）と１９２０年代の好況期を経て１９３０年代の世界恐慌による不況期にあり、また時期的には貴族や地主が屋敷での生活を維持するのも家事使用人を大勢雇うのも困難な時期でした。

さらに国際情勢は緊迫し、ドイツでアドルフ・ヒトラー、イタリアでベニート・ムッソリーニといった独裁者が台頭し、第二次世界大戦（１９３９－１９４５）開戦まで数年と迫った時代が選ばれているために、そうした情勢がドラマ内にも反映されています。

「原作に最も忠実な映像化」と評価されたドラマでありつつ、原作と異なる「ドラマだけの魅力」も大きくあるのです。もちろん、映像化に際して視覚情報が加わり、魅力的な俳優や英国の建物や屋敷、田園風景などを見られることも特徴で、ドラマ視聴後に原作を読むと、細かな設定が書き込まれていることにも気づけますので、是非、原作とドラマを相互補完的にお楽しみください。

本書は以下の作品をベースとしています。

- ドラマ『名探偵ポワロ』DVD（株式会社ハピネット）

対象

- 言及するドラマ『名探偵ポワロ』の作品話数はDVDでの収録順となります。
- 内容はDVDの完全版（NHK放送時にカットされた映像を含む）を対象とします。
- ドラマは英語音声・日本語字幕をベースとします。
- 原作を表記する場合、早川書房「クリスティー文庫」刊行作品を指します。

目次

はじめに 3
メインキャラクター紹介 15
第1-10話 20
COLUMN 1 家事使用人の制服 40

第11-20話 54
COLUMN 2 『名探偵ポワロ』と家事使用人 74
第21-30話 84
COLUMN 3 家事使用人は透明な存在なのか？ 104
第31-40話 114
COLUMN 4 あなたの家はどんな家？ 事件現場になった家 134
第41-50話 156

COLUMN 5　殺人は癖になる？　事件と動機　176

第51-60話　206

COLUMN 6　『名探偵ポワロ』の探偵像　226

第61-70話　262

あとがき　282

『名探偵ポワロ』全事件リスト　294

メインキャラクター紹介

◉エルキュール・ポワロ（デビッド・スーシェ／熊倉一雄）

英国在住のベルギー人探偵。ロンドンのホワイトヘイブン・マンション56B号室（途中、引っ越しあり）に事務所兼自宅を構える。上流階級や国家的事件など数多くの扱いが難しい事件を手がけており、英国のみならず、ヨーロッパでも知名度がある。

ベルギーの警察で長く働き、第一次世界大戦で母国ベルギーがドイツの侵略を受けたために英国へ疎開する。その疎開先スタイルズ・セント・メアリーでヘイスティングスと再会し、ふたりで『スタイルズ荘の怪事件』を手がけた後、英国で探偵稼業を始める。

自分の頭脳に自信を持ち、よく自画自賛するが、それに見合う能力を発揮する。卓越した論理性と人間心理を理解した推理力、細かいところに気がつく観察力を備え、他の人には見えない事件の真相を見つけ出し、容疑者を含む関係者全員を集めた場で推理を披露し、犯人を追い詰める「推理劇」とも言えるような手法を解決に用いる。

キーフレーズは「灰色の脳細胞」（grey cells）。脳の一部を指し、「もっと頭を使いなさい」という意味合いでよく使う。

トレードマークはゆで卵型の頭と、整えられた口髭。おしゃれで、どのような環境でもスーツ姿とエナ

メルの靴で現れる。都市が好きで田園は嫌い。几帳面で調和を好むため、衣装の乱れにも人一倍敏感であり、自分の事務所や他人の家でも置き物を揃えたりする。ハーブティー（ティザン）を好む。甘いものも好きでグルメ。

フランス人によく間違われ、「フランス人ではありません、ベルギー人です」と正す。「モ・ナミ（友）」「オールボワール（さようなら）」ほかフランス語が会話に交ざるのは、ポワロの祖国ベルギーの母語のひとつがフランス語であるため。

◉アーサー・ヘイスティングス（ヒュー・フレイザー／富山敬・安原義人）

ポワロの探偵助手。ポワロよりも若い典型的な英国人で、ホームズにおけるワトソンと同じ「物語の語り手」役となることもある。原作では名門校イートン校出身。正義感が強く、女性に優しく、善良なジェントルマン。退役した陸軍大尉（キャプテン）のため「キャプテン・ヘイスティングス」と呼ばれる。結婚後にアルゼンチンで仕事を始めた設定があるため、それ以降は時々英国に戻ってくる。

第一次世界大戦に従軍して負傷して帰国後、『スタイルズ荘の怪事件』でポワロと再会する。ベルギーに狩猟で出かけた際にポワロによって救われてから、探偵とポワロに憧れており、その後、ポワロのパートナーとして事件解決を手伝う。犯人が望むような推論を抱くが、その視点からポワロがヒントを得ることも多い。

ポワロ最大の親友で、原作で何度もポワロはヘイスティングスについて語る。

「それに、ある友人がいたんです——長年、わたしのそばを離れたことがなかった友人です。ときどき、ぞっとするほど馬鹿な真似をしたが、とても大切な友人だったのです。その愚かささえ、今じゃ懐かしいほどですよ。天真爛漫さ、正直な風貌、わたしのすぐれた才能によって、彼を喜ばせ、驚かせる楽しみ——言葉では言えないほど、何もかもが懐かしくてたまりません」（『アクロイド殺し』p.37）

「イギリスでは、なんといってもわたしの最初の友人だ——そうだとも、そしていまでも最愛の友だ」（『マギンティ夫人は死んだ』p.9）

ポワロ最後の事件『カーテン』で彼に立ち会ったのも、ヘイスティングスだった。

ドラマでは車が大好きで、愛車はダークグリーンのラゴンダ（英国の自動車メーカー）。カーアクションと、アクションをしないポワロの代わりに犯人を押さえる役目も担う。女性を信じやすく、綺麗な女性を見ると顔に出るため、ポワロによくからかわれる。

◉ジャップ主任警部（フィリップ・ジャクソン／坂口芳貞）

ロンドン警視庁、通称「スコットランド・ヤード」（庁舎が面した通りの名に由来）で事件捜査に当たる主任警部。ポワロとは1904年の国際的偽造事件「アバクロンビー事件」で共同調査をしてから何度も関わり、またドラマ内ではベルギー警察への貢献から表彰されるに至るなど、優秀な刑事としての力量も評価されている。

登場時はポワロが事件解決をすることがほとんどだが、現地警察からの捜査情報の共有や現場の調査、聞き込みを行う際の支援、犯人逮捕など、ポワロの円滑な推理に必要なバックアップを厭わない。原作に不在の話でもレギュラー出演し、深い友情で結ばれている。『スタイルズ荘の怪事件』から登場する最古参のキャラクター。

⊙フェリシティ・レモン（ポーリーン・モラン／翠準子）

ポワロの探偵事務所の秘書。非常に有能でミスもなく、独自のファイルシステムで犯罪情報を管理し、ポワロを支える。時に探偵助手として、ポワロの緻密な推理に必要な情報収集（関係者への聴取や接触、個性関係の調査など）を行い、事件解決に寄与する。原作では機械のような女性とされるが、ドラマではレギュラー化し、チャーミングな女性として描かれている。

「つまり、実務的な観点から見れば、彼女は女ではなく、機械だった――完璧な秘書だった。彼女はあらゆることを知っていて、あらゆることに対処できた。ポアロの生活をきりまわり、それを機械のように作動させた。正しい順序と秩序と方法で、という言葉はずっと昔からのエルキュール・ポアロのモットーだった。完璧な召使のジョージと、完璧な秘書のミス・レモンの二人のおかげで、彼の生活は最高の順序と方法が保たれていた」（『ヒッコリー・ロードの殺人』pp.5-6）

⊙ジョージ（デビッド・イェランド／堀部隆一・坂本大地）

ポワロの身の回りの世話をする男性使用人「ヴァレット」。几帳面なポワロに忠実に長く仕え、かつて貴族に仕えた経験から社交界の情報にも通じている。探偵助手としても非常に優秀で、原作ではポワロがレストランで出会った人物の名前と住所を突き止めたり、ドラマでも料理の腕を披露したりした。

ドラマにおいてジョージの登場は後半となり、前半のレギュラーはミス・レモンが務めることが多い。製作者ブライアン・イーストマンが、主人とヴァレットが主役のドラマ『ジーブスとウースター』（英国作家P・G・ウッドハウスの小説が原作）を手がけており、同じ「主従もの」を作るのを避けるため、クリスティー財団にかけあいミス・レモンの役を発展させたことによる（『テレビ版　名探偵ポワロ』p.82）。

第1話 コックを捜せ

THE ADVENTURE OF THE CLAPHAM COOK

該当原作作品

「料理人の失踪」（『教会で死んだ男』所収）

主要登場人物

ミセス・トッド
依頼主。ロンドン郊外クラパムで下宿経営。

イライザ・ダン
腕の良いコック。

アニー
若いハウス・パーラーメイド。

シンプソン
ベルグラヴィア銀行職員。トッド家に下宿。

ディヴィス
シンプソンの同僚。

ガイド

⊙**見どころ**――冒頭、探偵事務所にいるポワロは、相棒ヘイスティングスが読み上げる事件に興味を示さず、重大事とばかりに服の話をしており、ポワロの細かさとおしゃれさが示されます。そこに秘書のミス・レモンが依頼人を招き入れます。

この三人組に、途中から銀行での9万ポンド盗難事件を調査するジャップ主任警部が加わります。原作の多くは短編で、本作品もそのまま映像化するとすぐ終わってしまうため、物語に大きく手を入れ、原作に登場しない話でもヘイスティングス、ミス・レモン、ジャップが物語に関与しています。このため、原作以上にポワロと彼らのやりとりが増えており、彼らの個性や信頼や友情を楽しめるのがドラマの特徴です。

⊙**鉄道での移動**――ポワロとヘイスティングスは鉄道に乗り、失踪したコックのイライザが相続した湖水地方のコテージへ向かいます。豊かな自然に囲まれた田園風景を楽しむ英国紳士ヘイスティングスと異なり、神経質そうにするポワロが対比して描かれます。常にかっちりした服装のポワロは都市向きの人間でした。

鉄道での移動は英国の景色を様々に楽しませてくれるので、ドラマの大きな魅力です。

あらすじ

国家的事件や上流階級の犯罪を扱う私立探偵エルキュール・ポワロ。彼の探偵事務所に現れた依頼主ミセス・トッドは「失踪したコックの捜索」を依頼する。「家事使用人を見つける」という依頼の小ささにプライドを傷つけられたものの、ミセス・トッドから非難され、彼女の「腕のいいコックというのは貴婦人の真珠と同じ」（『教会で死んだ男』）との言葉に感銘を受けたポワロは、依頼を受けることに。

ロンドン郊外にある彼女の家でポワロは、失踪したコック・イライザの同僚アニーと、帰宅したミセス・トッドの夫、そして銀行で働く下宿人シンプソンに話を聞く。同じ頃、ベルグラヴィア銀行で9万ポンドの盗難事件があり、犯人と思われる職員ディヴィスが失踪していた。

偶然にも、シンプソンはベルグラヴィア銀行の職員で容疑者の同僚だった。一見、別々に見える「コック失踪」と「盗難事件」の思わぬ結びつきとは。

⦿階級を越えるポワロ――ポワロの魅力を際立たせるのが、誰に対しても礼儀正しいこととチャーミングさです。メイドのために椅子を引いて同じ目線で親身に話したり、後でメイドに助けを求めに行った際も素敵な笑顔を見せたりします。挑発的なポーターとの会話で、同行するヘイスティングスが怒っても、ポワロは丁寧な態度を変えません。

ポワロを演じた俳優デビッド・スーシェは「この番組をジャーナリストに説明するために作り出したフレーズ――手がかりを求めて、ポワロはまさにUpstairs, Downstairs（階上に行ったり、階下に行ったり）です――が一役買ったと思います」（『テレビ版　名探偵ポワロ』）と述べました。

スーシェが言及する『Upstairs, Downstairs』は、1970年代に世界中で大ヒットしたドラマ名で、上流階級のベラミー家の家族とその家事使用人たちを描きました。「階上」は主人たちの生活圏や主人たちそのものを、「階下」は屋敷の地下にある使用人が働く職場や使用人たちを指しました。

⦿1ギニーの報酬――ミセス・トッドはポワロへの依頼を途中で打ち切り、手間賃として1ギニーの小切手を送ってポワロを激怒させました。ギニーは英国の通貨単位で1ポンド1シリングの価値を持ち、医師や弁護士などの専門家へ報酬を支払う際に使われました。1ポンド=20シリングで、1シリング（5%）分は手数料相当でした。報酬額が少ないとはいえ、ギニーで支払った点では、最低限ポワロに敬意を表した形でした。

第2話 ミューズ街の殺人

MURDER IN THE MEWS

該当原作作品

「厩舎街の殺人」(『死人の鏡』所収)

主要登場人物

バーバラ・アレン
未亡人。ジェーンと同居。

ジェーン・プレンダーリース
写真家。バーバラの同居人。

チャールズ・レイヴァートン・ウェスト
下院議員。バーバラの婚約者。

ユースタス少佐
バーバラの友人。インド帰り。

ミセス・ピアス
アレン夫人宅の通いの家政婦。

ガイド

⦿見どころ――「ミューズ」は「厩舎」を意味します。都市に住む裕福な人々の住まいとなる表通りにある家々の裏に、馬車や馬、自動車を置いておく「厩舎」がありました。これら裏手のエリアを「ミューズ」と呼びました。ドラマ内ではメイドや運転手が停めた車で仕事をしています。ヘイスティングスもここにガレージを構え、愛車を停めていました。

こうした厩舎を改装した住宅に、アレン夫人たちは住んでいました。厩舎街の住まいは表通りほど立派ではなく、家賃も相対的に安いものです。原作でふたりの住まいは「せまい階段の下にあるドアを入ると、広い居間があった――馬小屋を改造したものに違いない。ざらざらのしっくい処理が施してあり、銅版画と木版画がかかっている」(『死人の鏡』)と描写されており、「厩舎」だったと明示されています。

ふたりが「裕福すぎない」設定は、随所に出ています。厩舎街に住み、同居して家賃を折半していること、住み込みのメイドが不在で通いのミセス・ピアスに掃除をしてもらっていること(住み込みより安価)などです。とはいえ、バーバラ夫人は中流階級以上が行うゴルフを趣味にしたり、脅迫者に数百ポンド支払ったりと、中流階級として通じる生活を

あらすじ

11月5日の祭事ガイ・フォークス・デー（国王爆殺未遂事件の記念日。首謀者の人形を引きずり回して焼き捨てたり、花火を鳴らしたり、かがり火を燃やしたりする）の夜。ポワロとヘイスティングスとジャップが祭りを眺めながら歩いていると、ヘイスティングスが「銃を撃っても花火で聞こえない」「殺人に適した夜だ」と話題にする。

翌朝、ジャップから電話で「銃による不審死があった」と連絡を受けるポワロたち。現場は、まさに「殺人」の話をしていたミューズ街（厩舎街）だった。

遺体はバーバラ・アレン。頭を銃で撃たれた状態で発見された。同居するミス・プレンダーリースは事件の時間には不在。一見自殺に見えたものの、様々な疑念から殺人事件として調査が始まる。

バーバラの交友関係は狭く、ポワロたちは婚約者レイヴァートン・ウェスト議員と、夫人と交友のあったユースタス少佐へ聞き込みに。そして、ユースタス少佐は目撃証言と現場に残った証拠から、夫人への脅迫疑惑で警察の取り調べを受けることになる。

できる立場にあったことがうかがえます。

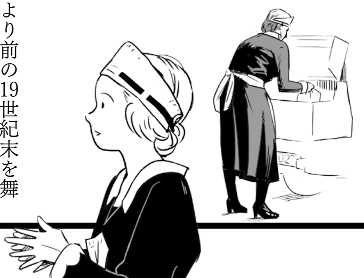
⊙馬車からタクシーの時代へ――1930年代を舞台とするこのドラマでは、主要な移動手段は車です。ポワロが移動する際は、ヘイスティングスの車か、ジャップに同乗しての警察車両か、タクシーとなります。

本作ではポワロとジャップが、ウェスト議員が泳いでいたプールがあるクラブを出ると、すぐに玄関にいたドアマンがタクシーを呼び、ふたりで乗り込みます。ドラマ内では「タクシー」とのポワロの呼び声を、何度も聞くことになります。

多くの場合、ポワロはタクシーを使います。その様子は、ポワロより前の19世紀末を舞台とするドラマ『シャーロック・ホームズの冒険』で、ホームズがハンサムキャブ（一頭立ての辻馬車）をよく使った姿に通じるでしょう。

なお、第1話の依頼主のミセス・トッドの家に行く移動手段もタクシーでしたが、料金の支払いはヘイスティングスが行っていたようでした。この辺にも依頼主の経済観念が出ているようで、ヘイスティングスは別の話でも他人の支払いをさせられます。

⊙コスプレキャバクラ?――ユースタス少佐が経営する飲食店はベトナムのアオザイを着て笠をかぶった女性店員や、舞台上で水着に近い格好の女性が歌を披露するなど、現代日本の「コスプレキャバクラ」の源流のような店舗でした。身なりのいい客からなっており、流行っていました。



第3話——ジョニー・ウェイバリー誘拐事件——

THE ADVENTURE OF JOHNNIE WAVERLY

該当原作作品

「ジョニー・ウェイバリーの冒険」（『愛の探偵たち』所収）

主要登場人物

マーカス・ウェイバリー
依頼主。400年続く伝統ある旧家の地主。

エイダ・ウェイバリー
マーカスの妻。財産を管理する。

ジョニー・ウェイバリー
夫妻の子供。誘拐される。

ジェシー・ウィザース
ナースメイド。

トレッドウェル
ウェイバリー家に30年仕える執事。

ガイド

⦿**見どころ**——ドラマで初めてカントリーハウスが舞台となります。家事使用人は執事トレッドウェルを筆頭に、ジョニーのナースメイド、ハウスメイド2名、コック、キッチンメイド、お抱え運転手が登場しました。

屋敷訪問時の定番となるディナーでもてなしを受け、ポワロは用意された寝室に泊まります。当時の屋敷はゲストをもてなす場所であり、屋敷作品の定番と言える展開です。ディナーの際には、ポワロとヘイスティングスは正装のタキシード姿となります。訪問時のスーツや就寝時の寝巻きまで含めて、ＴＰＯに応じて着替えました。

⦿**屋敷の経済力**——屋敷には華やかな雰囲気がありますが、舞台となるウェイバリー家の経済的困窮がドラマ内で語られています。「かつての見渡す限りの領地を売りに出した」「屋敷の工事が資金不足で停止」「ディナーも朝食も簡素」という描写です。

人事の面でも、執事の部下となるべき男性使用人の「フットマン」（従僕）が雇用されていません。その雇用は贅沢なものですが、執事トレッドウェルはかつてその職から執事へ昇進しており、「今は従僕を雇用できない」経済事情が語られています。

あらすじ

ポワロは事務所にやってきた地方の大地主マーカス・ウェイバリーから相談を受ける。息子ジョニーの誘拐予告状が届き、支払いがなければ誘拐するとの脅迫を受けているという。「誘拐事件がこのイギリスで？」（起こるはずがない）という反応をヘイスティングスは見せるものの、ポワロは事件を引き受ける。

ポワロはウェイバリー家の「領地に囲まれた屋敷」（カントリーハウス）を訪問することに。最寄りの駅で鉄道を降りるとお抱え運転手の車で出迎えを受けたポワロは、先に自分の車でやってきたヘイスティングスと合流し、ふたりの屋敷滞在が始まる。

翌日、事件の相談を受けていたジャップ率いる警官たちがやってきて、予告された時間での誘拐に備えるも、警戒の甲斐無く事件は発生。ジョニーは連れ去られてしまい、内部犯行を疑ったマーカスは使用人を集め、疑わしいナースメイドのジェシーを解雇する。

さらに、執事と対となる女性使用人の管理者ハウスキーパーも不在です。解雇されたメイドのジェシーの賃金を支払うハウスキーパーの役目は、夫人の秘書ミス・コリンズ（家事使用人ではない）が担いました。夫人が秘書を必要とすることも、屋敷の財政管理を含めて夫人が屋敷の実権を握っていることを暗示します。

なお、1930年代は領地を持つ地主たちにとって難しい時代でした。19世紀末から地主への課税が徐々に強化され、相続税の累進課税化、不労所得への課税率引き上げ、土地売買時の利益への課税があり、また過去の時代よりも穀物価格や地価も下がったためです。かつ、人件費は増加し、雇用できる家事使用人の数は以前より絞られる傾向にありました。

◉広い領地と隠し扉――ヘイスティングスの車の故障でポワロは、口直しの朝食を食べた村のパブから徒歩で屋敷に行かざるを得ませんでした。村から車道や牧草地を通り抜けて歩き続けたポワロが足を痛めるほどに、屋敷の周辺は広大で何もなく、最も近い村まで相当な距離がありました。

今回の屋敷では本棚に隠し扉があり、外へ通じる抜け道が出てきます。作中の説明ではカトリック教徒を逃がすのに使った通路の名残でした。これは16世紀に英国国教会へ切り替えを進めるエリザベス一世の時代にあった、カトリックの聖職者弾圧を示すものでしょう。カトリックの裕福な地主や貴族は聖職者を屋敷に匿い、捜索を受けた際には隠し通路から逃がしました。屋敷の歴史が古い、ということがよくわかる設定です。

第4話 24羽の黒つぐみ

FOUR AND TWENTY BLACKBIRDS

該当原作作品

「二十四羽の黒つぐみ」（『クリスマス・プディングの冒険』所収）

主要登場人物

ヘンリー・ガスコイン
レストランでポワロが目撃した画家。

アンソニー・ガスコイン
ヘンリーの双子の兄弟。

ジョージ・ロリマー
アンソニーの甥。劇場支配人。

ダルシー・レイン
ヘンリーの絵のモデル。

メイキンソン
ヘンリーの絵を扱う画商。

ガイド

◉**見どころ**――本作ではポワロが自発的に調査を始めています。報酬のない・依頼主がない事件への関与は、ポワロ作品では珍しいことではありません。原作でボニントンは歯科医ではなく、かつ、ヘンリーの正体は不明のままです。たまたまポワロはボニントンと「地下鉄」で出会い、レストランで見た正体不明の老人が死んだことを告げられます。そしてポワロは興味を持ち、優秀なヴァレット（従者）のジョージに命じて身元を突き止めさせました。ドラマで従者ジョージは、後半になるまで出てきません。

ところで、ドラマでポワロはほとんど「地下鉄」を利用しません。これはドラマの演出上では訪問先を出てすぐタクシーに乗る方が映えたからか、当時の地下鉄を再現しての撮影が困難だったからと考えられます。

◉**外国人としてのポワロ**――ヘンリーの住まいを訪問した際、その家の鍵を預かる第一発見者となった女性マレンから、ポワロは露骨に避けられます。彼女は外国人のポワロを怪しいと思い、同行するヘイスティングスに対して主に話しました。作中、ポワロは「怪しい外国人」として、冷たい態度で接せられます。典型的英国紳士のヘイスティングスは、ポワ

あらすじ

歯科医の友人ボニントンと「ギャラント・レストラン」で英国料理を楽しみつつ、そこにいた常連の老人に、ポワロは興味を覚える。ウェイトレスのモリーが、その老人は普段と異なる曜日に来て、かつ普段は食べないメニュー（トマトスープ、ステーキ・アンド・キドニー・パイ、そして黒いちごのクランブル）を頼んでいると語ったためだった。

後日、ポワロはボニントンの治療を受けた際、その常連客のヘンリー・ガスコインが見かけた日に階段から転落死したと聞かされる。ポワロはヘイスティングスとヘンリーの自宅を訪問し、そのアトリエでモデルのダルシーの証言を得て、画商メイキンソンやヘンリーの甥、そして双子の兄弟で仲違いをしていたアンソニーの存在を知り、調査を広げる。ところが、身内のアンソニーもまた、衰弱死していた。

アンソニーの財産を相続したのは、甥のジョージ・ロリマーだった。

ロの信頼性を高めるパートナーと言えました。

◉**グルメなポワロ**——ドラマのユニークなポワロの描写として、自ら料理を作るグルメなポワロの姿があります。事務所兼自宅にヘイスティングスを招き、燭台を立てたテーブルに母から教わった「リエージュ風のウサギの煮込み」を給仕するのです。また、ジョークを言ったヘイスティングスをたしなめ、かつ食べ方にも細かく指示を出し、感想を求めます。

◉**24羽の黒つぐみ**——タイトルは、クリスティーが度々題材にする童謡『マザーグース』の「6ペンスの歌」に由来します。これは、ヘンリーが食べた「黒いちご」と「黒つぐみ」をかけたものにもなっています。

◉**使用人について**——アンソニーの死を看取ったミセス・ヒルはハウスキーパーですが、ひとりで話し相手から身の回りの世話、料理、洗濯まで家事を行う「メイドオブオールワーク」と同じ立場でした。長く仕えた使用人に、雇用主は何か遺すものですが、遺言をのこさなかったアンソニーや、何もお礼をしない相続者の甥ジョージ・ロリマーはかなりのケチと言えるでしょう。

◉**真犯人を追い詰める舞台劇**——真犯人の前で真実を明らかにし、真犯人を警察の手に委ねるポワロの手法は、今回は劇場で警察スタッフ（科学捜査班）を巻き込んで行われました。こうした「劇」との相性がいいことは、ドラマの特徴といえます。

第5話

4階の部屋

THE THIRD FLOOR FLAT

該当原作作品

「四階のフラット」(『愛の探偵たち』所収)

主要登場人物

パトリシア・マシューズ
ポワロと同じマンションの住人。46B号室。

ドノバン・ベイリー
パトリシアに好意を持つ。

ジミー・フォークナー
パトリシアに好意を持つ、控えめな青年。

ミルドレッド
パトリシアの友人。

アーネスティン・グラント
ポワロの住むマンション36B号室に引っ越してきた女性。

ガイド

◉**見どころ**——ポワロはパトリシアにオムレツを振る舞ってもらい、その時に「かつて私にも愛する美しい女性がいたのですがね、マドモワゼル、あなたにそっくりの女性でした——ところが悲しいかな！　彼女は料理ができなかった」(『愛の探偵たち』)と、珍しく過去を披露します。ここでガス台や流しも出てきます。

几帳面さを示すように、ポワロはドノバンが気を失った際に気付けとしてブランデーを飲ませた際のグラスを、わざわざ自分で洗い、布巾で拭き、元の場所へ戻しました。借主が亡くなった家にもかかわらず、です。

◉**マンションとメイド**——ポワロが住むマンションの構造が、様々な角度で明らかになります。各フロアごとに間取りは細部が異なるようですが、パトリシアやグラント夫人の部屋のキッチンや運搬用リフト、メイド部屋などが登場します。

ドラマではポワロの従者ジョージは登場せず、住み込みの使用人もいません。しかし、同じマンションのミセス・グラントは住み込みのメイドを雇用し、かつメイド部屋を用意しました。原作でこの部屋は「建設業者が犬小屋としてデザインしたのを、人間用に直し

あらすじ

ポワロの事務所兼自宅の「ホワイトヘイブン・マンション」の3階（日本では4階に相当）にミセス・グラントが引っ越してくる。彼女は上の階のパトリシアの部屋に手紙を置くものの、無視された。

その日のうちに、ミセス・グラントは訪問者を迎えた後に殺される。

第一発見者は、ポワロの階下に住むパトリシアの友人ドノバンとジミーだった。ふたりとパトリシア、その友人ミルドレッドの4人は、ポワロも鑑賞していた劇を見終えた後、マンションに戻ってくる。部屋の鍵をパトリシアが失くしたため、ドノバンとジミーは運搬用リフトからパトリシアの部屋に入り込むが、間違えて一つ下の3階に侵入してしまい、かつミセス・グラントの死体を発見することになる。

警察が来る前に、同じマンションの住人の異変を知ったポワロは捜査を開始するが、目撃者はいなかった。

たような部屋だった。床の大部分はベッドに占領されており」（『愛の探偵たち』）と描写されました。日当たりなどが悪い部屋が、メイドにあてがわれたのです。

⦿**作中劇**―殺人事件を題材にした劇で、ポワロは犯人を執事だと予想します。しかし別の人物が犯人でした。納得がいかないポワロはヘイスティングスに文句を言い、さらにパトリシアがオムレツを振舞ってくれた際にも、自身の主張を熱弁するほどでした。この辺の大人気なさがチャーミングです。

⦿**ヘイスティングスと車**―車といえばヘイスティングスと思われるぐらいに、これまでの話で彼とその車が登場しました。今回は最後に犯人の逃亡に彼の車が使われた上に事故で破損する悲劇に遭遇します。この悲劇は、もう一度起こります。しかも新車で。

⦿**ティザン**―ポワロは時々フランス語を織り交ぜます。そのうちの一つが「ティザン」（ハーブティー、薬湯）です。彼は英国人が愛する紅茶よりティザンを愛し、11時のお茶の時間にミス・レモンにお願いして淹れてもらっています。ポワロを演じるに際して、主演のデビッド・スーシェは93項目のポワロの在り方を作り、そのうちの2番目が「ティザンを飲む――めったに紅茶は飲まない。紅茶のことをポワロは〝イギリスの毒〟と呼ぶ」と記しました（『Poirot and Me』）。

ティザンはポワロの個性でした。

第6話 砂に書かれた三角形

TRIANGLE AT RHODES

該当原作作品

「砂にかかれた三角形」（『死人の鏡』所収）

主要登場人物

バレンタイン・チャントリー
恋多き魅惑的な女性。

トニー・チャントリー
バレンタインの夫。中佐。ホテルに滞在。

マージョリー・ゴールド
ホテルに滞在。

ダグラス・ゴールド
ホテルに滞在。マージョリーの夫。

パメラ・ライル
ホテルに滞在。

バーンズ
少佐。ホテルに滞在。

ガイド

⊙**見どころ**—ドラマ初の海外ロケです。舞台のロードス島はトルコに占領された時期が長く続き、街にはアラブの雰囲気が溢れています。ドラマの頃である1930年代はイタリア領となり、黒シャツ党（ムッソリーニが組織したファシスト党）のメンバーが街を闊歩しました。この様子は街を歩く際や、出国時の手続きでポワロをスパイと誤認して勾留する風景などに反映されています。この拘束で出国できなかったポワロは、助けを求めて追いかけてきたパメラに応じて、事件の調査に協力します。

⊙**ホテル描写**—このドラマシリーズでは、数多くのホテルと、そこで働く従業員たちが登場します。ストーリーにまったく関与しない、意識しないと気づかないこうした人々を、細部まで徹底的に配役している点に製作陣のこだわりが見えます。

ドラマ全体のホテル描写には、おおよその流れがあります。宿泊客は車で運転手の出迎えを受け、ホテルに到着するとポーターやベルボーイに荷物を運んでもらい、ドアマンが開けたドアを通り抜け、フロントで受付を済ませます。

ホテル従業員の制服は、多くの場合、各ホテルのブランドカラーで統一されています。

あらすじ

ポワロ宛の郵便を届けに来た郵便配達人へ、ポワロが住むホワイトヘヴン・マンションのドアマンは、ヘイスティングスは狩猟へ、ミス・レモンは姉のところへ、そしてポワロは海外へ出かけていると伝える。

そのポワロは、エーゲ海南部にあるロードス島にいた。旅行客のパメラ・ライルに声をかけられ、事情通の彼女からホテルの滞在者について様々な情報を得る。

事件は、同じホテルに滞在するトニーとバレンタインのチャントリー夫妻と、ダグラスとマージョリーのゴールド夫妻の関係がもつれた末に起こる。5度の結婚をしたとされる美しいバレンタイン（原作ではシャネルのモデル経験あり）は、何度もダグラスにアプローチし、彼は熱を上げる。その末に、バレンタインが毒殺される事態を招いた。

バレンタインが飲んで死んだピンクジンは、本来、夫のトニーが飲むはずだった。トニーは自分を殺す動機を持つダグラスを疑い、警察も彼を容疑者として拘束する。

今回の舞台パレスホテルは「緑」を基調としました（フロントは黒のスーツ）。

ホテルにはラウンジバーとレストランがあり、そこでは白いジャケットを着たバーテンダーやウェイターが給仕をしました。

⦿**現地の食を楽しむ**——ポワロと登場人物たちは、観光の途中で地元のレストランに立ち寄りました。口論が起こって感情的になった同席者を尻目に、ポワロは注文を取りに来たウェイターへメニューの詳細を確認しながら注文を行い、場を鎮めました。

⦿**妥協なきポワロ**——荷造りの手伝いをするホテルのメイドが、ポワロのトランクにシャツやネクタイをしまおうとする際、ポワロは「丁寧に扱ってくれ」とやり方を指導します。相対的に他人には柔らかい物腰で接するポワロも服装に関しては妥協しないようで、このドラマのポワロらしいシーンです。

なお、このホテルメイドのメイド服も「緑」でした。

第7話 海上の悲劇

PROBLEM AT SEA

該当原作作品

「船上の怪事件」（『黄色いアイリス』所収）

主要登場人物

ジョン・クラパトン
船の乗客。大佐。

アデリーン・クラパトン
船の乗客。ジョンの妻。病院経営者。

エリー・ヘンダーソン
船の乗客。ジョンの知人。

ダーモット・フォーブス
船の乗客。将軍。ミセス・クラパトンの古い知人。

ガイド

⦿**見どころ**――ヘイスティングスが活躍する回です。乗客たちを楽しませようとヘイスティングスはクレー射撃大会を企画し、女性たちに射撃の指導をします。船のデッキでエリー・ヘンダーソンと話していたポワロは、やってきたヘイスティングスに彼女を紹介するも、ヘイスティングスは大会参加を促し、彼女は挨拶をして自室へ戻ります。

この状況にポワロは「おぉ、ヘイスティングス、ヘイスティングス」と、紹介を無駄にした友人の振る舞いを嘆きますが、それさえも通じず、ポワロは呆れてさらに三度、ヘイスティングスの名を繰り返しました。

皆が観光に出かけた後もヘイスティングスは船に残り、船員と大会運営について協議を重ねました。与えられた役割を果たそうとする善良な生真面目さと、それしか考えられずに周りをあまり見ていない姿が描かれています。

その一方で、ヘイスティングスは船員のひとりが怪しい挙動をして船を降りた際にはいち早く気づいて尾行し、彼が盗んだティアラを換金しようとする現場を押さえ、捕まえる活躍を見せました。また、真犯人が逃げようとした時も最初に止めました。

あらすじ

　エジプトのアレキサンドリアへ向かう客船に乗っていたポワロとヘイスティングス。長い旅の時間を過ごす乗客たちが少しずつ会話をしたり、交流をしたりする中で最も目立つのは、クラパトン夫妻だった。
　夫のジョンは仕えるように妻アデリーンに接し、そのアデリーンは女王然たる振る舞いでジョンの言葉尻を捉えては人前で恥をかかせる。その傲岸不遜な態度は他の乗客たちにも向けられ、客船で注目を浴びる存在となっていた。
　そんな中、港へ立ち寄って乗客たちが観光をする間に、船の客室に残ったアデリーンが、鍵のかかった部屋で死んでいるのが見つかる。船は停船中で、誰もが入り込める状況にあった。部屋からはティアラと紙幣が盗まれ、さらに現場には夫のジョンも知らない首飾りが落ちていて、外部の物売り商人の犯行も疑われた。

　原作ではヘイスティングスが不在で、この一連のエピソードはありません。

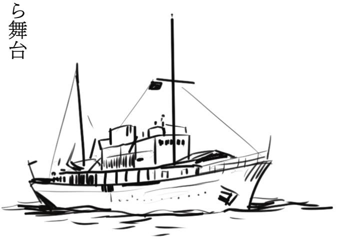
⊙ショーとしての推理と犯人——意外なことに、この第7話目で初めてドラマ内で、容疑者や関係者を集めて事件を締めくくる「ポワロの推理劇」が披露されます。これまでの推理は、あくまでもひとりの犯人を追い詰めるものでした。

「推理」の参加者は船内のホールに集められて席に座り、さながら舞台劇を見るように、ホールの中心に立つポワロの話を聞きます。ポワロは演出を加えて、人形を使いながら犯人が用いたトリックを再現し、犯人を解き明かしました。

　その後のドラマで見られるポワロの「推理劇」には、容疑者それぞれに殺人の動機があるという秘密を明かして個々に追い詰める描写がありますが、今回の事件は容疑者も少なく、推理劇は犯人ひとりだけに向けられたもので済みました。

⊙事件の結末——ドラマと原作では犯人も「推理劇」の流れも同じです。しかし、その結末が違いました。原作の犯人は心臓が弱く、持病の薬を飲んでいました。それに勘付いていたポワロはショッキングな演出をして、犯人が心臓麻痺で死ぬ可能性を考慮しつつもトリックを明かし、最終的に犯人がショック死する結末を作りました。

　ドラマと原作で共通するのは、「殺人（殺人者）を許さない」というポワロの強い信念です。このスタンスは作中で度々示され、第65話「オリエント急行の殺人」と最終話「カーテン」で試練を迎えることとなります。



第8話

なぞの盗難事件

THE INCREDIBLE THEFT

該当原作作品

「謎の盗難事件」（『死人の鏡』所収）

主要登場人物

レディ・マーガレット・メイフィールド
事件の依頼主。

トミー・メイフィールド
軍事企業を経営し、新型戦闘機の開発を主導。レディ・メイフィールドの夫。

サー・ジョージ・キャリントン
国防大臣。

カーライル
トミー・メイフィールドの秘書。

ミセス・ジョアンナ・ヴァンダリン
ドイツのスパイ疑惑がある女性。

ガイド

◉**見どころ**―依頼を受ける前のポワロの事務所でのやりとりで、ポワロたちの個性が際立って描かれます。ポワロは丹念に革靴を磨き、ソファに寝転がったヘイスティングスは建築を学ぶ女性に好意を抱くも話題に困っており、訪問しても彼女が留守でその母とお茶を飲んでばかりだと愚痴りました。ミス・レモンは匿名の依頼電話を繋げない・匿名では事件をまとめた名簿に組み込めないとポワロに伝えます。

ここにポワロの几帳面さ、ヘイスティングスの人の良さ、そしてミス・レモンの正確性を追求する姿勢が表れています。

◉**貴族の儀礼称号について**―「レディ」は身分を示す儀礼称号で、一般的には貴族の夫人に付くものです。ただレディ・マーガレット・メイフィールドは「夫は貴族ではない」「父が伯爵だから」とポワロに説明します。これは公爵・侯爵・伯爵の娘は「レディ」を名乗れることを意味しました。

本ドラマシリーズで出てくる男性貴族の多くは「ロード」、準男爵とナイトは「サー」で呼ばれます。翻訳すると「卿」でひとまとめになることが多いです。なお、原作のメイフ

あらすじ

レディ・メイフィールドは匿名を使ってポワロに連絡を取り、「国の緊急事態」だと助力を願う。夫が屋敷に招くゲストのミセス・ヴァンダリンは、ドイツのシンパとされる危険な女性で、新型戦車の開発に関わる侯爵に接近して極秘情報を盗み出し、その結果、侯爵を自殺に追いやったと噂される人物だった。レディ・メイフィールドは同様の事件が起こることを恐れていた。

ポワロはレディ・メイフィールドの依頼を引き受け、ミセス・ヴァンダリンやそのほかのゲストたちに交ざって、メイフィールド邸に滞在する。しかし、ディナーを終えた後に盗難事件が発生。新型戦闘機の機密書類が盗まれた。すぐに警察が呼ばれ、ジャップが陣頭指揮をとり、最も疑わしいミセス・ヴァンダリンを調べるも、書類は見つからないままだった。

ィールドはサーの立場から栄達して、ロードを名乗れる貴族に叙せられています。

⊙**ドイツ**——ドラマの時代（1930年代）はヒトラーが台頭し、1935年には第一次世界大戦後に締結した講和条約のヴェルサイユ条約を破棄し、軍備強化を始める年となります。そうした情勢下であるため、ドラマの中で英国の脅威としてドイツは何度も描かれます。

⊙**家事使用人の立ち位置**——事件が起こったメイフィールドが所有する屋敷では、明るいうちはガーデン・パーティーを、それから夜にディナー、そしてその後に応接間でカードゲームや個別の会話などを行いました。屋敷には執事とメイドの姿がありました。

ジャップは部下に家事使用人の職場も捜索するよう命じましたが、多くの場合、家事使用人は事件の証言者であって、犯人ではありませんでした。

⊙**ヘイスティングスの受難**——不幸にも屋敷に招かれなかったヘイスティングスは、ポワロに協力するために、近くの宿「スリー・クラウンズ」に宿泊しました。さらにジャップと相部屋に。地方が舞台となる際、ポワロたちはパブに併設された古風な旅館（イン）によく泊まりました。

そして、このドラマでもヘイスティングスは自分の車でやってきますが、またも車のトラブルに遭遇。容疑者を追いかける必要から、今回は警察車両を借りて、ポワロと一緒に追跡しました。このような追跡劇は、何度も登場します。

第9話 クラブのキング

THE KING OF CLUBS

該当原作作品

「クラブのキング」（『教会で死んだ男』所収）

主要登場人物

ヘンリー・リードバーン
映画会社のボス。

バレリー・サンクレア
俳優。リードバーンが撮影中の映画で主演。

バニー
ヘイスティングスの友人。プロデューサー。

ラルフ・ウォルトン
俳優。かつてスターだった。

ポール
モラニア国王子。バレリーと婚約。

ガイド

◉**見どころ**——映画会社に君臨するリードバーンはモダンなデザインの屋敷に住んでいました。この屋敷の撮影地は「High & Over」という名の1931年に完成した邸宅で、Y字をした独特の形と、真っ白な垂直の壁に埋め込まれたガラス窓などの外観から、周囲の人々から「飛行機の家」とも呼ばれました。プールもあります。リードバーンの屋敷はモダニズムでありつつ、アール・デコの意匠も反映されています。

日本でこの屋敷に近い建物は、旧朝香宮邸（東京都庭園美術館）です。旧朝香宮邸は同時期の1933年に竣工したアール・デコ建築の世界的傑作とされています。

このような斬新なデザインの屋敷に住んだ意味はさておき、新しい家ほど電気、ガス、水道、空調などが便利になり、生活空間として快適なものだったでしょう。石炭を使う暖炉があるような古い屋敷は、石炭の煤で周囲が汚れたり、煙突の掃除も必要だったりするため、メンテナンスコストがかかりました。

◉**通勤する富裕層**——リードバーンの屋敷は、彼の映画スタジオまで車で通える距離にあったと考えられます。建物自体も近隣の住宅地と近く、バレリーは屋敷の窓からウィローズ荘

あらすじ

ポワロは、ヘイスティングスの誘いを受け、ヘイスティングスの友人バニーが働く映画の撮影スタジオへ向かう。そこでポワロは、旧知のモラニア国の王子ポールと再会。ポールは、映画の主演俳優バレリー・サンクレアの婚約者だった。

撮影所のすべてを仕切るヘンリー・リードバーンはバレリーに言い寄り、夜に自分の屋敷へと招くが、リードバーンは死んでいた。バレリーはリードバーンの死体がある部屋から明かりが見えた、近所のウィローズ荘へ逃げ込む。

王子ポールは、婚約者にスキャンダルが起こると家族から結婚に反対されるため、ポワロに解決を求める。ポワロは警察の捜査とは別に、事件の真相を調査する。

を確認できました。もしも広大で古風な屋敷であれば、周囲には何もなかったことでしょう。

◉ブリッジ—夕食後のゲームは珍しいことではなく、『名探偵ポワロ』では第7話「海上の悲劇」、第8話「なぞの盗難事件」、第55話「ひらいたトランプ」などで、この「ブリッジ」をして遊びました。52枚のカードを使って4名の参加者がペアに分かれて勝負するため、誰とペアを組むかも重要でした。

19世紀末のホームズの時代は「ホイスト」が行われており、そこから派生した「ブリッジ」がポワロの時代には主流になっていました。

◉犯人を見逃すポワロ—ポワロは、リードバーンを殴りつけて意図せずに殺すことになった犯人を見逃しました。ポワロは殺人犯には常に厳しい態度で接しましたが、今回はポール王子の依頼でかつ事件の捜査ではなくバレリーの名声を守ることが目的でしたので、真相を伏せたまま、事件を迷宮入りにさせました。

事件の真相をすべて知りながら、警察に対して真相を隠すことは、この後も起こります。真犯人に自殺する機会を与えて死刑を免れるようにするなど、ポワロは時に事件の真相を世間に明かすより、自身の価値観を優先しました。彼は私立探偵でした。

第10話

夢

THE DREAM

該当原作作品

「夢」(『クリスマス・プディングの冒険』所収)

主要登場人物

ベネディクト・ファーリー
パイ工場の経営者。

ルイーズ・ファーリー
ベネディクトの後妻。

ジョアンナ・ファーリー
ベネディクトと先妻の娘。

ヒューゴー・コーンワージー
ベネディクトの秘書。

ハーバート・チャドリー
ジョアンナの恋人。

ガイド

⦿**見どころ**——冒頭で50周年を迎えるベネディクト・ファーリーの新工場オープン記念式典が開催されます。作中、「1935年度の売り上げは最高を記録した」と述べており、1935年という世界恐慌を経た時代にあって、この工場は従業員の雇用確保に貢献したことでしょう。一方で、グルメなポワロは、「ファーリーのパイは最悪だ。数は世界一だが」「厳しく管理しても味は良くならない」と否定的でした。

⦿**屋敷兼オフィス**——原作でファーリー邸はノースウェイ館という古風な時代遅れの建物となっており、「邸宅」として独立していました。ドラマでは工場の敷地内にあるオフィスビルの上層に彼の私邸と執務室があったように見えます。従業員が使うオフィス用の入り口と、ポワロを出迎えた執事がいるプライベート用の入り口とに分かれていて、上層階で繋がっていたようです。

ドラマで使われた屋敷兼オフィスの撮影地はフーバー・ビルディングという1933年に竣工したアメリカの掃除機メーカー、フーバー社の英国本社ビルでした。モダンなその雰囲気はアール・デコのデザインで、ドラマの時代に建てられたものでした。

あらすじ

ポワロは、パイ工場を経営するベネディクト・ファーリーから依頼の手紙を受け取った。夜9時半という遅い指定時間に、工場に隣接する彼の自宅を訪問するポワロ。ベネディクトは、自殺する夢を毎晩見ており、誰かが自分に自殺を強いており、そうしたことができるのかとポワロに尋ねる。材料が少ないためにポワロが回答を控えると、ベネディクトはポワロへの相談を終わらせ、彼を帰らせた。

翌日、ポワロはジャップからの電話で、ベネディクトが自殺したことを伝えられる。発見現場の遺体の様子は、ポワロが直接聞いた「自殺の夢」と重なり、自殺と考えるのが妥当だった。しかし、ジャップは、ポワロがベネディクトから受け取った手紙の存在を重視して他殺の可能性を疑い、ポワロを呼び出したのだった。

ベネディクトの後妻ルイーズ、先妻との間の娘ジョアンナはベネディクトの巨額の遺産を相続できるため、それぞれ殺人への動機を持っていた。

⊙**ミス・レモンの不満とポワロの優しさ**――ポワロの秘書ミス・レモンは、非常に優秀で我慢強い人であり、そうであればこそ几帳面なポワロの下で働けています。その彼女の数少ない不満として出たのが「タイプライターの鍵盤がよく詰まるので、新しいものが欲しい」でした。意外にも倹約家のポワロは前の住人が置いていったタイプライターをそのまま使わせ、ミス・レモンの要望をことごとく無視していました。

ドラマの最後でポワロは、ミス・レモンへのプレゼントとして大きな包みを持ってきました。当然、タイプライターと思いきや、中から出てきたのは置き時計でした。これはミス・レモンが窓から身を乗り出して外の教会の時計で時間を確認したためでした。ポワロはポワロなりにミス・レモンが窓から落ちないように気を使った結果で、ミス・レモンも文句は言えずに、タイプライターをそのまま使い続けました。

この「ずれ」がドラマの魅力の一つです。

⊙**推理劇と仕込み**――ポワロは関係者全員とジャップを集めて、殺害現場で犯人のトリックを立証するため、ヘイスティングスに協力を仰いで銃を撃たせました。「犯行を再現して犯人を追い詰める」だけではなく、今回は参加者（読者やドラマの視聴者）に殺人の追体験をさせて真相を明かします。エンタメ性の高い演出です。

君は、ジセダイ何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント 著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研 若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み 既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!